

本日の学び テーマ:「愛によって仕える者へ」 テキスト:ガラテヤ5章2-15節

【理解の手がかりとして】

このガラテヤの信徒への手紙は「キリスト者の自由の大憲章」と呼ばれてきた。パウロがここで言っている「自由」とは何か。聖書が「自由」というとき、何を問題としているのか。

聖書が問題にする「自由」は、単に外側のことに留まらず、内側からの自由を問題にしている。私たちは自分勝手に気ままに行動でき、生きられれば、それが自由であると考えられるかもしれない。制限のあるところでは自由がなく、それが「不自由」だと考える。しかし本当の自由とは、ただしたいことが出来る、ということではなくて、自分の明確な意志によって行動できる、ということであり、それは時に自分の行動に制限を加えることも出来る、といったことなのだと思う。「これはしてはいけない。だからしない」という意志と決断によって行動できる、それも「自由に生きる」ということの大切な側面だと思う。そしてその「自由」的な判断と行動とを「愛」を伴って行いなさい、とパウロは勧める。

その「愛」を伴ったパウロの「自由」な振る舞いに関してだが、第一コリントの信徒への手紙でパウロは「偶像の供え物」に関する問いかけに対して答えている。「兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」(1 コリント 8:13) と。「兄弟をつまずかせないために」——これがパウロの本願。それを軸にして自分の行動を制限する、パウロの「愛」ある自由さを見て取れる。パウロの語る「自由」とは、このような他者に対する愛を伴う自由である。神の御心を成すために、他者と共に生きるために、喜んで自分の自由をささげることが出来る自由こそが、福音によって与えられる、信仰によって得られる自由だと言うのである。

2節でパウロは「ここで、わたしパウロはあなたがたに断言します」(5:2) と強い口調で語りかける。それに続いて語られるのは、救いは「割礼のしるし(律法)」によるものか、それとも「キリストの十字架(信仰)」によるものか、ということ。ユダヤ主義者たちは、「とりあえず割礼は受けた方が良い」と勧めたように思われる。しかしパウロは、それが「救いの条件」とされることには断じて「否!」を言う。これは「偶像に供えた肉を食べるか否か」という事柄とは次元が全く違う。

パウロは「自由」にされていた。キリストの福音によって自由とされていた。「律法を守ることによって救われる」というユダヤ的価値観から全く自由にされていた。だからこう言う。「もし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方になります」(5:2) と。ガラテヤの人々が、キリストの十字架による救いを知りながら、律法主義へと逆戻りしようとしている危険の中で、パウロはこの手紙を書いている。キリストがあなたたちのために十字架にかかれたことが無駄になってしまうのではないかと揺れるガラテヤの人々に釘を刺すのである。

4-5節では「律法によって義とされようとする」と「信仰に基づいて義とされる希望をいただくこと」が鋭く対比されている。律法によって義とされようとするなら、「いただいた恵みも失います」(5:4) とまで言っている。「その恵み」(原語では定冠詞付)とは、キリストによって明らかにされた神の恵みであり、その恵みを受ける道は「キリスト信仰しかない!」とパウロは述べているのである。恵みとは唯々いただくもの。私たちが取りに行くものではなくて「受けるもの」である。

6節の言葉は大変有名。「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」(5:6) ——この句は、ガラテヤの信徒への手紙の主張の全体を要約したものと言うことができる。割礼といった習慣やしきたりが問題なのではなく、キリストの恵みをどう受け止めるか、そしてそれにどう応答するのかということが根本的に大切なことだ、と言うのである。「自由」の反対は「奴隷(束縛)」。後者のほうを「~しなければならぬ」と言い換えるなら、前者は「~せずにはいられない」という主体的・積極的な応答の態度になるだろう。

7 節でパウロは「あなたがたは、よく走っていました」(5:7) と言う。「よく走っていた」とは、正しい信仰の道を走っていた、ということ。それなのに異変が起こった・・・それは「邪魔」(5:7) をする人々の存在である。「惑わす者」(5:10)「かき乱す者」(5:12) とも言われている。そのような人たちは決して大勢ではなく、9 節で「わずかなパン種」(5:9) と言われているようにごく少数の者たちであったのかもしれない。しかしその僅かな者たちの存在と影響力がはなはだ大きくなってしまっていた、ようである。※「パン種のたとえ」(マタイ 13:33 ※この場合は良い意味であるが)

そういう状況的心配の中で、しかしパウロはガラテヤの信徒たちのことを、彼らの信仰についてあくまで信頼していたよう。10 節後半で「わたしは主をよりどころとしているあなたがたを信頼しています」(5:10b) と言っているように。このようにパウロは、ガラテヤの信徒たちは一時期の迷いから覚めて必ず立ち直ってくれる(福音の真理に立って生きて行ってくれる)という確信をもって、この手紙を書いている。※一方、その「わずかなパン種」たる「惑わす者」(5:10)「かき乱す者」(5:12) に関しては厳しい言葉を告げている。「あなたがたを惑わす者は、だれであろうと、裁きを受けます」(5:10) と。※11 節——コダヤ教(律法主義の彼ら)は「十字架(のキリスト・イエス)」につまずいた。なぜなら、彼らの目には「律法を軽視し、安息日にしてはならないことをし、罪人らと食事をし、神殿を混乱せしめるイエスはまさに反コダヤ(反律法)」と映ったからである。しかしそのイエス様の行動(自由)はどこから発していたのか。

「愛によって互いに仕えなさい」(5:13) ——これは 6 節の「愛の実践を伴う信仰こそ大切です」(5:6) と響き合う。思うのは、イエス様御自身がその道を歩まれた、ということ。イエス様は自由であられた。それと同時に、すべての人々に仕える僕となる道を歩まれた。弟子たちの自ら手ぬぐいと水で足を洗われた場面にてこう言われた。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(ヨハネ 13:14) と。この自由と愛とを両立されたイエス様に、私たちキリスト者の生き方のモデルがある。私たちの信じる主、救い主イエス様は、僕として生きられたお方。イエス様は、その完全な自由を「肉」(人間の我欲/罪)の働く機会となさらず、僕として仕える愛の道を歩まれた。そしてこの私たちもその道に進むように期待されている。

【聖書教育より】

「パウロはガラテヤの人たちに『愛によって互いに仕えなさい』と勧めました。では、私たちにとって『愛』とは何でしょうか？まず自由に話し合ってみてください。」(大人クラス)

--